1　松尾・丁田遺跡

調 査 地　　加東郡社町松尾・田中地内
調査期間　　２０００年　８月２４日から
　　　　　　　　　　　１０月　４日まで
原　　因　　公共下水道管埋設工事
原 因 者　　加東郡社町　担当課ー下水道課
調査協力　　重機提供ー(有)西畑建設　(株)岸本組
調査面積　　約５４０㎡

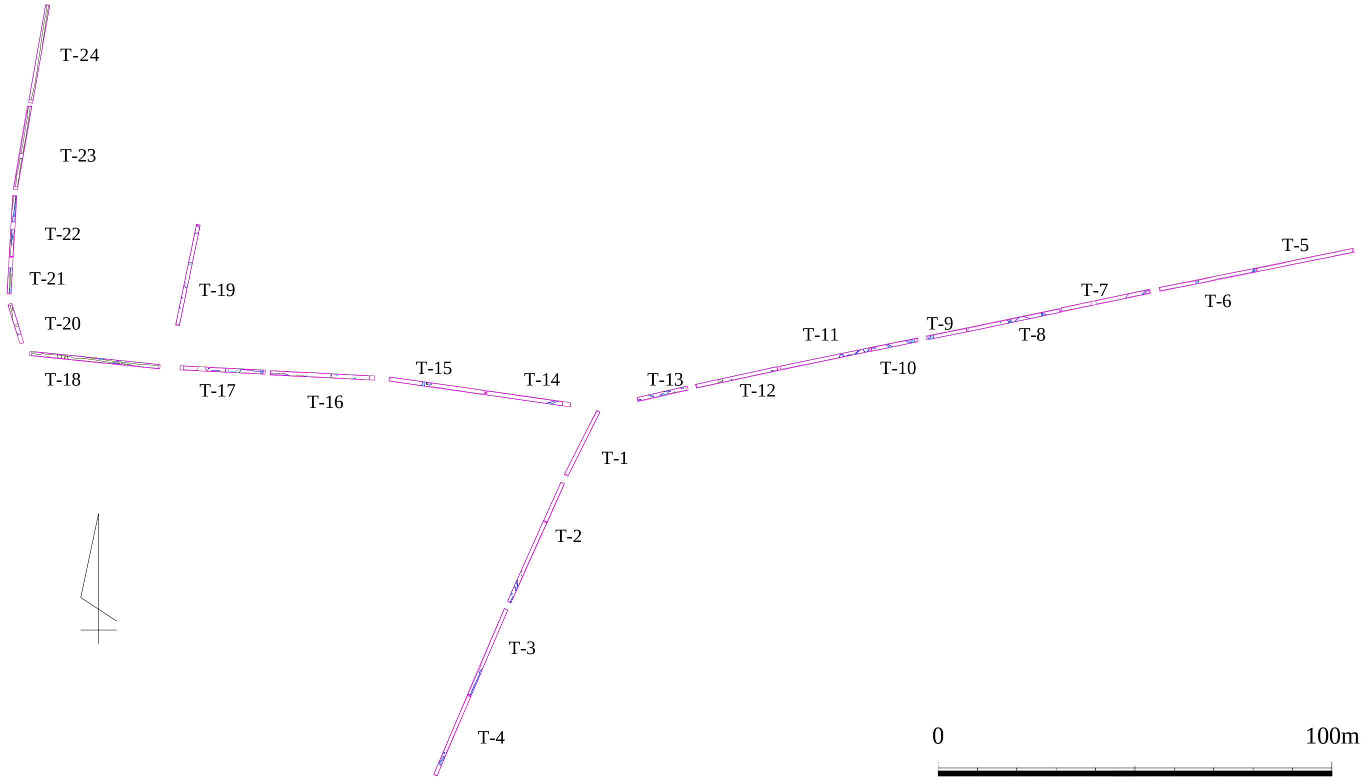
位置図

はじめに

　田中地区周辺には、弥生時代前期から始まる社・大塚遺跡が北側に、弥生時代中期中葉に初源をみる松尾・山西遺跡が南側に広がっている。この松尾・丁田遺跡も中期頃に初源をみると考えられていたが、その規模等については判然としなかったところから、その実態を把握する事を目的として、工事に先行し、遺構の有無・遺存状況を確認することにした。

調査の概要

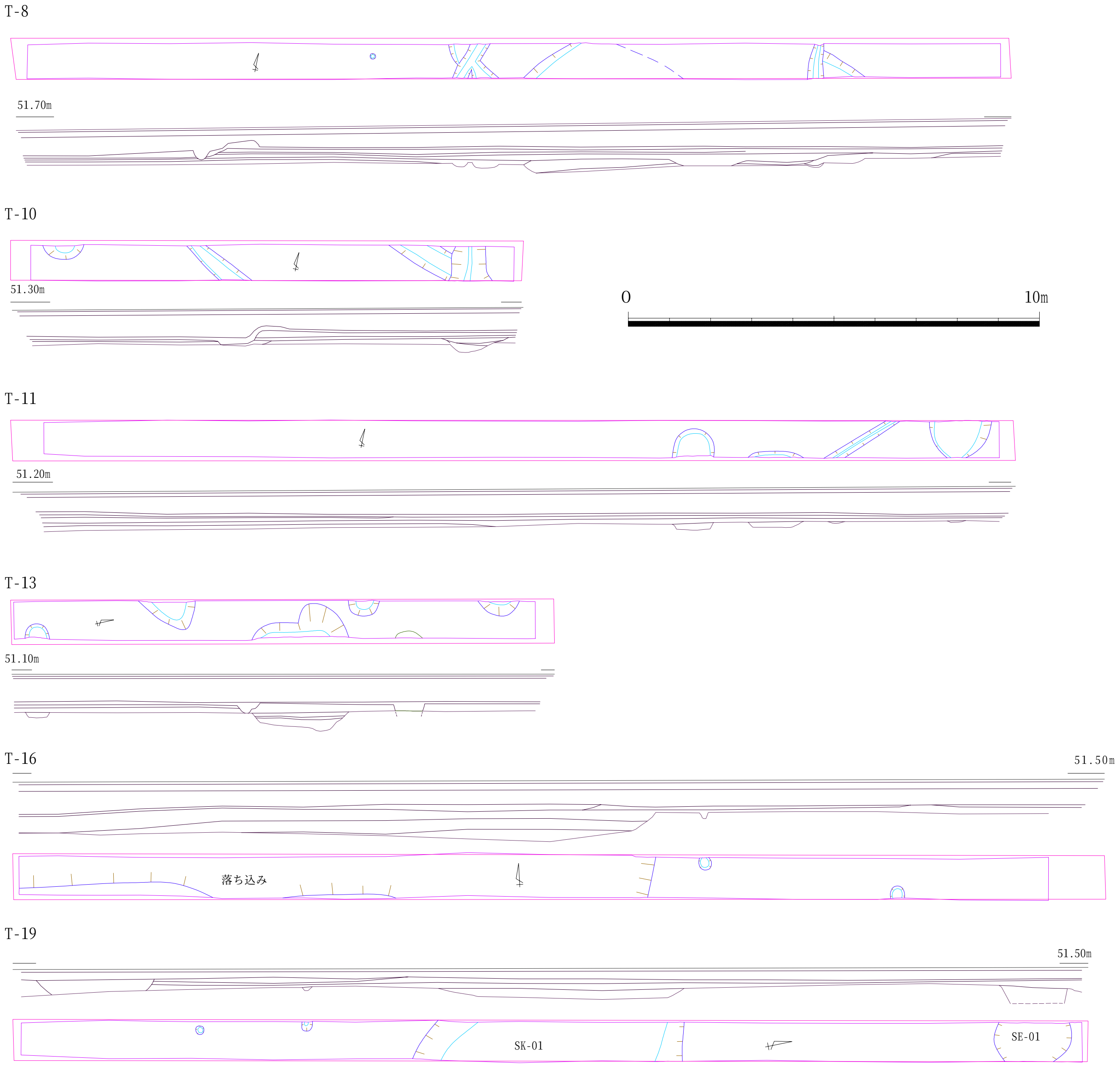
　調査は下水道工事により埋管される部分において実施したが、人工部分や排水路等の横断管部分については除外している。また、撹乱が著しい地点についても調査対象から除外した。



トレンチ設定図

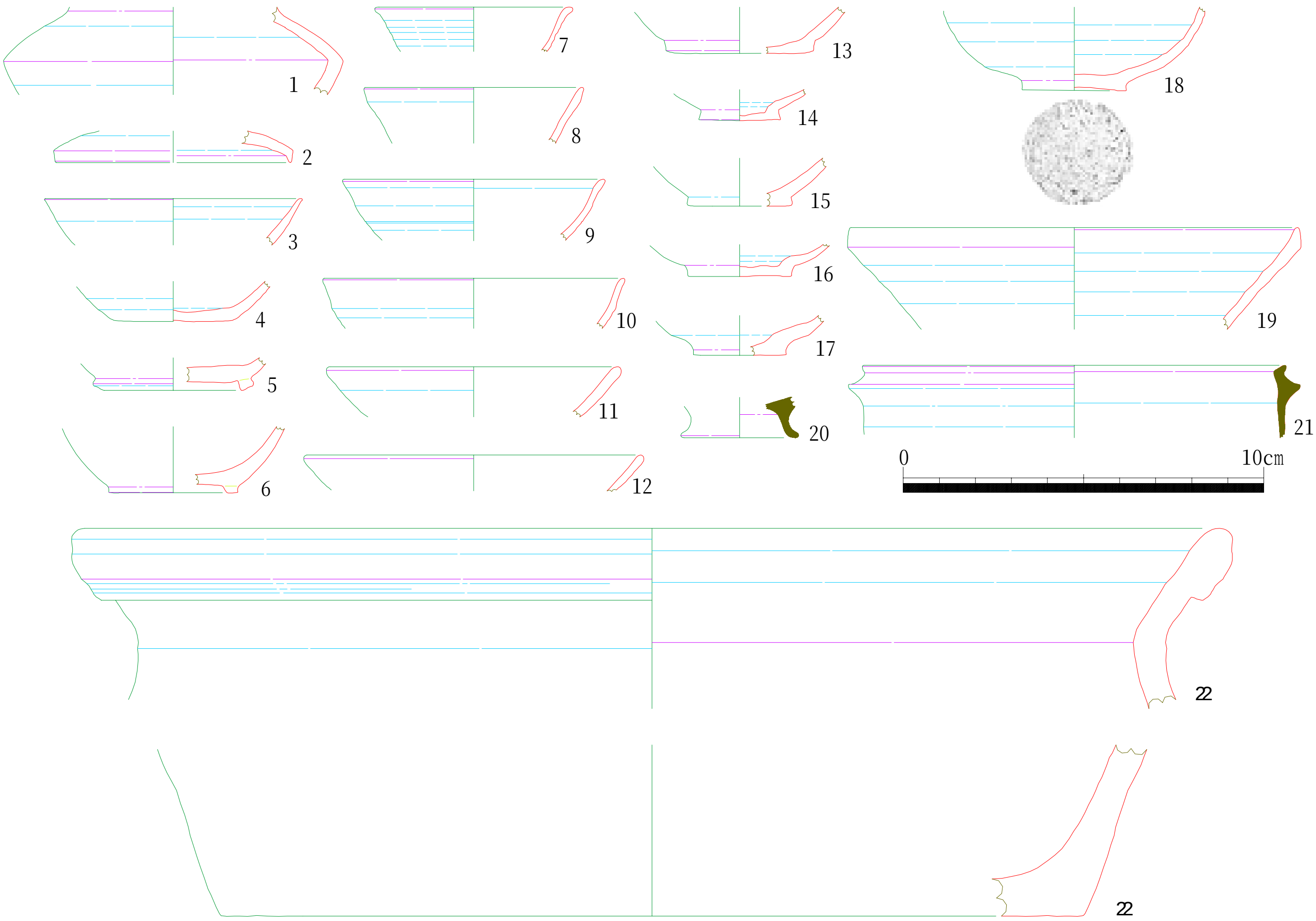
　遺構の検出状態は、東西に延びる道路部分では東に行くに従い遺構密度は薄くなり、南北に延びる部分では遺構は皆無である。Ｔ－２では不整形な土坑や、旧来の杭列が検出されている。Ｔ－６

～１０付近では遺物が出土しておらず時期的には明言できないが中世？と思われる溝・土坑がみられるほか、洪水による砂礫層みられる。Ｔ－１２・１３で検出された土坑からは、少量ではあるが弥生時代中期の甕類が出土しており、この遺跡の初源を示している。Ｔ－１６・１７には沼状の落ち込みがみられ、北側にある「ハチロマチ池」の池尻と推定され、本来は池そのものがもっと広範囲に拡がっていたものと理解される。Ｔ－１９では「二石入」とへら描きされた備前焼の大甕が破砕され投棄されたかたちで出土した土坑(ＳＫ－０１)もみられる。Ｔ－２２では現在の道路に沿ったかたちで室町時代の溝が検出されている。



遺構図

出土遺物は、コンテナケースで１箱である。須恵器の蓋・坏・壺・甕・椀(山茶碗)・捏鉢、土師器では土釜・小皿、備前焼の大甕があり、図化が可能なものは２２点である。



遺物実測図

遺物写真

まとめ

　調査によって本遺跡の初源は弥生時代中期にあるが、出土遺物が微細片であるところから、詳細は明らかではない。ただ、Ｔ－１３付近に集中するところから、弥生時代の遺跡範囲はより北側の水田に広がるものの、決して広範囲に及ぶものではないとおもわれ、谷部を隔てて北側に位置する社・大塚遺跡の分村というよりは、この集落の範囲内の少し離れたところにあたるといった状態であるのかもしれない。

弥生時代中期の松尾・丁田遺跡

　その後、室町時代になって、Ｔ－６～１０付近では水田耕作等にかかるとおもわれる溝が、Ｔ－１６・１９ではピットや土坑が検出され、少なくとも室町時代には田中地内に重複するかたちで集落が形成されるものと思われる。

　ただ、同地区の薬師堂には承安２(1172)年の体内銘がある木造大日如来坐像ー県指定ーが祀れており、平安時代末期頃には集落が構成されている可能性を示唆している。

像高153.1cm

材ーヒノキ

彩色等は後補

1991.03.30　県指定

T-1・T-2

T-4

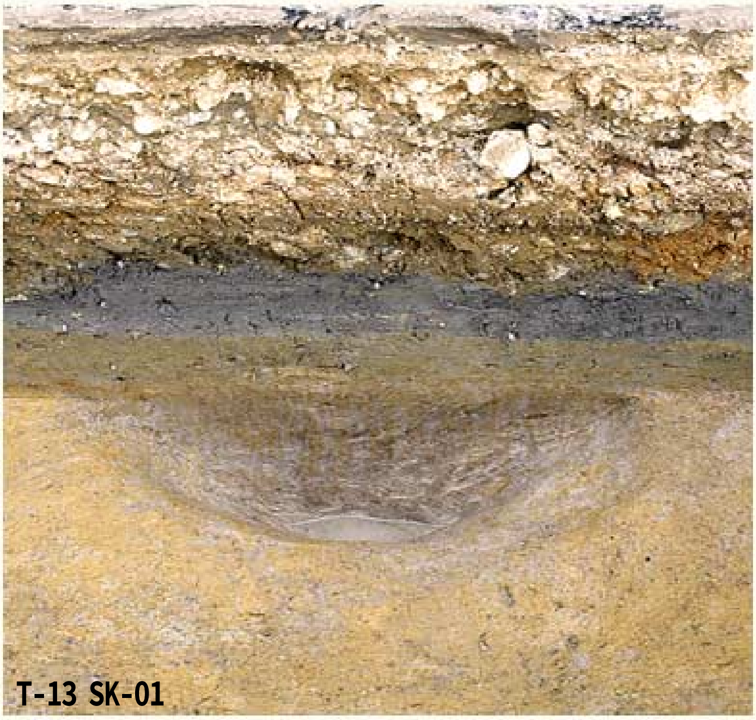
T-6 SD-03

T-7 SD-04

T-8

T-10 SK-01

T-13


T-13 SK-01

T-14

T-15

T-19

T-23